

# 高大接続特別部会の審議の状況について

## 1. 高大接続特別部会設置の経緯

- 平成 24 年 8 月 28 日の中央教育審議会総会では、「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」（答申）において、高校教育の質保証、大学入学者選抜の改善、大学教育の質的転換を、高等学校と大学のそれぞれが責任を持ちつつ、連携しながら同時に進めることが必要であると提言された。  
これを受けて、文部科学大臣から「大学入学者選抜の改善をはじめとする高等学校教育と大学教育の円滑な接続と連携の強化のための方策について」諮問が行われた。
- このため、中教審の関係分科会での検討状況等を踏まえつつ、諮問事項を審議する総会直属の特別部会が設置された。

## 2. これまでの審議経過

- 「大学入学者選抜の改善をはじめとする高等学校教育と大学教育の円滑な接続と連携の強化のための方策について」文部科学大臣から諮問（平成 24 年 8 月 28 日）。
- 平成 24 年 9 月 28 日に第 1 回を開催し、大学入学者選抜の現状・課題等について、有識者から意見を聴取しながら、高大接続の在り方について審議。
- 教育再生実行会議における高大接続・大学入試の在り方に関する審議の開始にあたり、安西部会長から高大接続特別部会の審議状況について報告（平成 25 年 6 月 6 日）。
- 高大接続特別部会の審議状況等も踏まえ、教育再生実行会議が第四次提言（「高等学校教育と大学教育との接続・大学入学者選抜の在り方について」）を取りまとめ（平成 25 年 10 月 31 日）。
- 教育再生実行会議の第四次提言も踏まえて、高大接続特別部会における審議を再開（平成 25 年 11 月 8 日）。
- 平成 25 年 12 月 12 日に高大接続特別部会と高等学校教育部会の合同会議を開催。
- これまで計 10 回の会議を開催。

## 3. これまでの議論の方向性

- 先を見通すことの難しいこれからの時代に必要な力を育てるには、各学校段階での教育が相互の連携のもとに行われることが不可欠。
- これまで、大学入学者選抜が、高校生の学習意欲の喚起、幅広い学びの確保、学力の状況の把握等の機能の多くを担っていたが、大学入学者選抜の選抜性が低下した現状においては、これらの機能は主に高校教育においてしっかりと担っていくことが必要。
- このため、高校教育の質の確保・向上の取組（高等学校段階の学力状況の客観的な把握の仕組みの構築等）を充実するとともに、これを踏まえ、大学入学者選抜はこれからの時代に必要な力を判定・育成していく観点から、学力に加えて、志願者の能力・意欲・適性等を多面的・総合的に評価する大学入学者選抜に転換することが必要。

- 総合力を見る大学入学者選抜への転換という観点から、大学入試センター試験の改善（活用力や言語運用能力等を問う問題等も含めた出題教科・科目の在り方、C B T化等の実施方法の在り方）、推薦・A O入試の改善（学力把握の取組の充実）、資格・検定試験等の活用等が必要。
- また、生涯学び続け主体的に考える力の育成等、大学教育の質的転換を図ることが必要。
- 大学教育・高校教育それぞれの改善を図りつつ、両者の連携を強化することが必要。

## 4. 主な意見の概要

### 1 多面的・総合的に評価・判定する大学入学者選抜への転換

（1）総合力を見る大学入学者選抜への転換（入学志願者の多様な能力・適性等の評価の推進）

- ・ 高等学校における学習到達度や大学教育に必要な能力・適性の判定等、大学入学者選抜が担うべき機能について整理することが必要。
- ・ 高校教育との円滑な接続のため、大学入学者選抜においては、高校教育の成果の確認と、大学教育に必要な能力・適性等の判定の二つの視点のバランスをとることが必要。
- ・ 高校教育の質の確保・向上の取組により高校段階で教科の到達度を評価した上で、大学入学者選抜においては活用力や意欲を重視することが必要。
- ・ 大学が多様化し機能別分化が求められる中で、大学入学者選抜の在り方についても、機能や類型に応じた検討が必要。
- ・ 大学入学者選抜は各大学が置かれている状況に応じ、従来の選抜機能のほか、教育・学習支援機能が求められている。
- ・ 入学者選抜は大学入学後の教育や成績と相関があることが重要。
- ・ 「人物重視の入試」という言葉だけが一人歩きしがちであるが、本来は「多面的・多元的な評価」という意味であり、表現には注意が必要。
- ・ 思考力や表現力、学習意欲等を丁寧に評価し具体的に測る方法の開発が必要。
- ・ 「丁寧な選抜」は、面接に限定することなく、論文や高校での活動歴等多様なものを含めるべき。
- ・ 丁寧な選抜を実施するには時間がかかるため、学年暦や学事暦も併せて検討が必要。
- ・ 大学は入口では学力を重視し、出口では汎用的能力を重視している。今後の入学者選抜では、学力は一要素と考え、それ以外の能力の評価も必要。
- ・ 知識を前提にした接続から多様な接続を進めていくためには教科・科目型ではない暗記型以外の能力を測るテストが必要。
- ・ 大学教育における社会で求められる能力の育成の前提として、大学入学者選抜においては汎用的能力を測定することが必要。
- ・ より丁寧な入学者選抜を行うためには、各大学の実施体制の整備や業務の効率化のための仕組み等が必要。
- ・ 大学入学者選抜に求められる絶対的な公平性・公正性の在り方について見直しが必要。
- ・ 多様な能力・適性等を多面的にきめ細かく評価する観点から、外部試験等の活用が必要。
- ・ グローバル人材育成の観点から TOEFL 等の活用が必要。

- ・外部試験等の活用にあたっては、アドミッション・ポリシーとの整合性が必要。
- ・資格取得を入試の評価尺度に入れるのであれば、どのような点を評価するのかを明確にすべき。
- ・体験活動やボランティア活動等も含めた受験生の様々な学習活動歴の評価が必要。
- ・調査書の改善をはじめ高等学校の評価の活用が必要。
- ・評価手法については、パフォーマンス評価など近年の認知科学・学習科学の研究成果やICT技術の活用、様々な先導的取組等を踏まえて多面的に考えることが必要。
- ・選抜性の高い大学では、入学者選抜は硬直化しており、どのように選抜を多様化していくか議論すべき。
- ・アドミッション・ポリシーを明確化した上で、「達成度テスト（発展レベル）」と組み合わせる個別入試を多様化していくことが必要。
- ・選抜の多様化にあたっては、生徒の過度な負担増加とならないよう配慮が必要。
- ・入学者選抜時の募集人員の大きくくり化については、入学後の進路変更が可能となり、大学での学びのミスマッチの解消につながる。
- ・高等学校における学習の早期分化の是正の観点から、募集単位の大きくくり化を進めることが必要。

## (2) 推薦・AO入試の改善

- ・推薦・AO入試については多様化が進展しており、ある程度の類型ごとの対策が必要。
- ・大学教育への円滑な接続の観点から、推薦・AO入試における基礎的な学力把握の取組の充実が必要。
- ・高校で行われた評価結果の高校・大学間の共有のほか、ポートフォリオの活用等による受験者の具体的な学修履歴の把握・評価が必要。

## 2 大学入試センター試験の改善（「達成度テスト（発展レベル）（仮称）」の在り方）

- ・細分化した出題教科・科目の精選をはじめ、出題教科・科目の在り方の検討が必要。
- ・基礎的知識を測る試験として現在と同様の枠組みで実施するのか、教科科目を大きくくりにして実施するのか、検討が必要。
- ・活用力を問う問題の充実、グレード別の成績提供、複数回実施、実施時期の見直しの指摘。
- ・現在のセンター試験は科目数の多さ、実施上の困難さ、素点の合計での合否判断と課題が多く、単純化や、点数の表示を偏差値化するなどの対応が必要。
- ・推薦・AO入試等は少人数に対して行われており、多数の志願者に対して多様で丁寧な評価を行うためには、各大学が活用できる新たな方法が必要であり、CBT化や言語運用能力・数理論理力・分析力・問題解決能力等を測る問題やテストの開発が必要。
- ・センター試験は教科型の識別力が高く、新たな共通テストが汎用的能力を測る場合、教科型の識別力が失われないようにすることが必要。
- ・達成度テストの検討に当たっては、高校関係者の意見も踏まえつつ、高校教育への影響に留意することが必要。また、資格検定の活用等、専門高校等の生徒への配慮も必要。
- ・アメリカではSATやACTに加えて高校の成績を重視しており、共通テストの改善や在り方の検討に当たっては高校教育の質保証の充実が前提として必要。

- ・達成度テストの在り方の検討に当たっては、大学の活用のしやすさという観点も必要。
- ・「発展レベル」を目標準拠型の試験にすることは、複数回実施を前提にすれば、方向性として妥当だが、IRTを活用した試験の設計には10年くらい時間が必要。
- ・目的準拠型試験に変えるなら、定員管理の在り方の検討も必要。
- ・基礎と発展レベルの関係はイギリスのGCE0レベル（16歳時に受験する現在のGCSE）とGCEAレベル（18歳時に受験）の関係を参考にすればよい。

### 3 高校教育の質の確保・向上（「達成度テスト（基礎レベル）（仮称）」の在り方）

- ・これまで大学入学者選抜が高校生の学習意欲の喚起、幅広い学びの確保、学力の状況の把握の機能を多く担っていたが、これらの機能については高校教育がしっかり担っていくことが必要。
- ・高校段階の学力状況の客観的な把握の仕組みの検討を含めた高校教育の質の確保・向上の取組の充実が必要。
- ・正課の授業は大学進学のための知識型の教育で精一杯であり、汎用的能力の育成は放課後や土曜授業と言った正課外の授業というのが現状。
- ・記憶型の学力を身に付けることに加え汎用的能力の育成まで目指すには、高校生の負担増の認識や配慮が必要。
- ・多様な高校に一律の成果を規定することは困難であり、ある程度の目標を持ちながら達成度テストを活用し、成果を確認していくことも必要。
- ・小学校から大学まで社会との連続性を意識しながら学ぶことが重要であり、高校におけるキャリア教育の充実が実践できる場所で取り組むことが重要。
- ・大学で必要とされる能力と中学・高校の教育・指導内容を近づけなければ、教育内容の評価には限界があるので、新テスト創設に当たっては、抜本的に中学・高校の教育内容を見直すことが必要。
- ・入学者選抜は学習指導要領に準拠しており、学習指導要領は何を教えるかというコンテンツベースの手法をとっている。一方で、大学はアウトカム重視の教育手法であり、高校から大学への連続性を考えれば、学習指導要領の在り方の見直しが必要。
- ・汎用的能力を重点的に育成するのが「総合的な学習の時間」であり、高校が「総合的な学習の時間」に積極的に取りかかり、大学教育につなげていく姿勢を示すことが必要。
- ・学習指導要領ベースの教育の成果を正確にアセスメントすべきだが、汎用的能力のアセスメントをどのように行うかが課題。また、指導する教員の資質や待遇の充実が必要。

（「達成度テスト（基礎レベル）（仮称）」について）

- ・達成度テストを受けることで生徒のモチベーションをどうあげるのか、生徒が受験の目的意識を持てるようにすべきで、基礎レベルの試験の方向性を出すことが先決。
- ・能力を評価するための段階別に分けた試験として、個人の差別化ではなく、個人の能力値を証明することが必要。
- ・小中学校の学習状況調査のA問題は知識の理解度、B問題は汎用的な能力を測り、意欲や態度は総合的な学習の時間で育成するという枠組みがある。意欲や態度の評価は課題だが、パフォーマンス評価とポートフォリオ評価を導入する流れもある。このような中、高校においても全国学力・学習状況調査のイメージが使えると考えられ、生徒のキャリ

ア設計や自己学習に使えることが必要。

- ・知識や技能もある程度測れ、いつでも受験でき、特別な準備を要しない汎用的能力を測るテストにすべき。教え方、学び方を変えなければ高校生の意欲はあがらない。活用力型のテストなら教育の質を変える可能性がある。
- ・アクティブラーニングは生徒の満足度が高いと言われているが、基礎力や実践力が弱いという指摘もあり、基礎的な力を評価する基礎レベルのテストは必要。
- ・教育効果の把握や生徒の学習状況の参考として使うのであればそれなりの意味がある。大学入試には使わず、「高校学力調査」というような名称が必要。
- ・高校教育部会では到達度テストは、生徒の学習意欲向上、自らの学力証明として使えるものとして提案された経緯があるが、達成度テストの基礎レベルは、主目的が、学校の指導改善ではなく、入学者選抜であることを明確にすることが必要。
- ・「達成度テスト（基礎レベル）（仮称）」は、就職試験や推薦・AO入試等に活用される仕組みとすることが必要。
- ・基礎レベルで測れる水準を示し、それを就職や入学者選抜で使えることが必要。
- ・達成度テストが導入された場合、高校・大学が負担増となる印象が現場には強いが、導入を前提に教育課程や定期考査の内容や時期も見直し、達成度テストにシフトしていくことが必要。

#### 4 大学の人材育成機能の強化

- ・諸外国のように、共通試験の活用により、各大学の個別試験では意欲や体験等も評価するとともに、個別学力試験に係る労力を大学教育の改善に注ぐことが必要。
- ・入学段階での評価から卒業段階への評価へ転換することが必要。成績評価や卒業認定の厳格化が必要。
- ・企業の評価への活用等のためには、学生の学修成果の客観的な可視化が必要。
- ・学位授与に関して、教員の教授科目がどう関わるのか、学生は何を修得したから学位授与に至ったのか、教員と学生にしっかりと意識付けすることが必要。
- ・大学はディプロマ・ポリシーをきちんと決めて、そこに至るにはどういう教育を実施し、どんな人材を求めるのかを明確にすることが必要。

#### 5 高等学校教育と大学教育の連携強化

- ・高校段階と大学段階のそれぞれで教育をしっかりとすることが前提。
- ・大学の出前授業は、高校側にとっては生徒が大学の学びや自分が大学で何をしたいかという意識付けに大変有意義なものであり、大学側にとっては大学での教育内容を分かった上で入学してもらえるとというメリットがある。
- ・高大連携を個々の大学で対応するには限界があり、地域のコンソーシアムや教育委員会が中心となって調整することや、資金面での支援も必要。
- ・推薦入試で早期に進学が決まった生徒に対する大学教育の準備における、高大の連携が必要。
- ・地方には大学が少なく、生徒が大学に触れる機会が限定されているので、オープンキャンパスは進学先の大学を判断するいい機会。

- ・高校と大学のそれぞれが育成する能力やアウトカムについて、相互に理解するためにしっかりと両者がコミュニケーションを取っていくことが必要。
- ・アメリカの高校では英語と数学でコモン・コアとしてその教育内容の共通化を図っており、大学もその成果のアセスメントのためのテスト開発に協力している。高校・大学間の相互理解と協力が日本でも必要。
- ・高校の指導要録を進学先の大学に引き継ぐことで調査書の信頼度が上がり、高大連携も緊密化する。

## 6 その他

(高等学校教育から大学教育までを通じて育成する力)

- ・知識にとどまらない汎用的能力の育成が必要。
- ・社会から求められてきた汎用的能力は小学校から大学を通じて育成すべき力。
- ・汎用的能力の評価には、PISA（OECD生徒の学習到達度調査）が一つの指標。
- ・教育の評価手法について、小学校段階から大学まで一貫したものが必要。
- ・高校、大学、産業界での評価基準が一律ではなく、評価観の連続性が必要。

(高等学校と大学の接続の在り方)

- ・高大接続に当たっては、生徒自らの能力・意欲・関心に基づく大学選択や大学が求める学生を見いだすといった視点が重要。